

# Mランドニュース Vol. 56

## 丹波ささ山校 平成23年11月1日発行

発行 (株)篠山自動車教習所 〒669-2436 兵庫県篠山市池上569  
 TEL. 079-552-0815 FAX. 079-552-3940 発行責任者 豊田文雄  
<http://www.sasayama-ds.com/> E-mail info@sasayama-ds.com

### 《今月の言葉》

「うそからまことが出てくる」というのは、本当のことだとしても、人間というものは、うそを繰り返す言うのがあんがい苦手なのだろう。その「うそ」の中に、何らかの真実味がこもっていることが必要で、それをどうやって見つけ出して行くかがポイントである。

河合隼雄先生(こころの処方箋より)

### Mランドフェスタ開催

十月二十三日(日曜日)、第六回『Mランドフェスタ』を開催しました。ファンの集いをより発展的にして、広く多くの方に参加していただけるようにとフェスタと改名しました。

今回は、東日本大震災の復興への想いを、Mランドだけでなく篠山市全体で現地へ伝えること、そのためには「まず、篠山から元気を上げよう」「篠山を盛り上げよう」として、その元気を東北へ贈り、日本全体へと繋げていこうという趣旨です。



→篠山の街をみんなで美しくしようと、午前中は百人規模での清掃活動を行いました。写真は、篠山東中学校の生徒諸君。



→清掃活動後、チームごとで個人の体験発表。さらに代表して四人の方にステージ上で発表していただきました。自らの気づきや感想を話したり聴いたりすることで体験の内容や仲間との関係が深まります。



→カフェ「ミロ」の唐揚げとミロバーガーも大好評。卒業生のボランティアスタッフが楽しんで参加してくれました。



→人気の「しし汁」は篠山名物。ヘルシーな猪肉と味噌の旨味で早々に一五〇杯を完売。



→地元篠山太鼓の「鼓篠組」は、伝統的な和太鼓に無限の可能性を感じ、そのどこか懐かしい響きが篠山の城下町にこだまするようにとの思いをもつ集団です。アメリカ、中国での海外公演の経験ももち、勇壮な太鼓で東北へ向けてのエールを送りました。



→トライアスロンの「チームブレイブ」(代表 八尾彰一氏)のメンバーも自転車のトレーニングにあわせ参加。チームで集めた震災復興のための義援金三八・七五二円を持参してくれました。



→恒例となった「カーパレード」はこれまで以上に磨きがかかり、八人のインストラクターの息の合った隊列と迫力ある動きにギャラリーから称賛の拍手。



→女性社員のお点前でお抹茶を振舞いました。茶道は日本を代表する文化であり、人として学ぶべきものがたくさんあります。その場面に少しでも触れていただきたいと願うMランドでは、いろいろな機会ですこれを取り入れることにしています。



→当日の参加者の思いと支援物資を積んで、宮城県南三陸町に向けての車を見送り、参加者による記念の集合写真を撮りました。

Mランドフェスタで、宮城県の榊木の屋石巻水産の中村暢宏氏より、震災時の体験談を参加者全員で拝聴しました。



体験を語る中村氏

その中で中村氏のお嬢様（日香さん中学二年）の体験記が紹介され、会場は真剣な空気でこれに聴き入りました。その原文を掲載します。

湧谷中学校二年  
中村 日香

三月十一日、この日は中学校の卒業式でした。卒業した先輩達は、卒業式の日というよりも、大震災の日という印象の方が強いんじゃないかなあと思います。

あの日の地震は、本当に大きな揺れでした。家がミシミシと音を立てて、冷蔵庫やタンスの中の出が出てきました。私は柱につかまって立っているのがやっとでした。ひざがカタカタふるえて、うまく歩けませんでした。

びっくりしたし怖いしで、パニック状態だったと思います。外を見ると電柱が傾いていて、なおさらびっくりしたのを覚えています。これは津波がくる。と思って、父の運転する車に祖母と私と妹が乗り、中学校へ逃げました。外は雪が降っていました。あの日雪が降らなかったら、と今でも思います。

学校に着くとすぐ、四階に上がりました。「おばあちゃん、はやく！」と、祖母をせかしたときのあのあせりを、大震災の話題が出るたびに思い出します。四階に上がると、湊中の友達がいました。教室に入ってすぐわると、体の力が一気にぬけていく気がしました。ホッとしたのもつかのまでした。津波がきました。外を見ると、屋根の上に人がいました。三、四人ぐらいたったでしょうか、そこまでは覚えていません。第一波が白いしぶきを上げながら家をなぎ倒していききました。屋根の上の人たちは、真っ黒な波のうずみの中に埋もれていきま

した。いつのまにか雪がつもって、真っ黒な波と、雪の真っ白いのと、人のうめき声とも言葉ともつかない声や、友達が泣く声とで、黒い絶望が広がっていき感じました。私はその中で、何も言えず何もできず、ただ呆然とその風景を見ていました。その日の夜は、西の方がずっと明るくて、気味が悪かったです。あとで聞いた話では、門脇小学校が燃えていたそうです。雪も降っていたので、寒くてどうしようもありませんでした。友達と毛布にくるまって、話をしていました。もしも友達がいなかったら、ずっと泣いていたかもしれません。家族が無事か分からなくても、笑顔を見せてくれる友達の強さに支えられていたと思います。

と。これは本当にすごいことだと思えます。家族全員無事ということに感謝したいです。

家族は全員無事でしたが、学校は私達の学年で一人、先輩の中では二人が亡くなりました。でも、またどこかから出てきそうな気がして、いまだに亡くなったということが受け入れられません。

震災のあと、初めて電気がついたときは、本当にうれしかった。また、蛇口をひねって水が出たときのあの感動は、一生忘れないと思います。『あたりまえ』は全然、あたりまえなんかじゃないと思います。

この震災を通して、友達や家族の大切さを改めて強く感じました。そして『あたりまえ』は決してあたりまえではないということが分かりました。『あたりまえ』に毎日を過ごせることに感謝したいです。また、『一寸先は闇』というのは、本当だと思えます。必ず明日があるわけじゃない。だからこそ、『今日』を大切に生きて毎日悔いのないように生きることが大事だと思います。今生

きていることに、家族がいることに、そして一緒にいてくれた友達に精一杯の『ありがとう』を言いたいです。亡くなった人の分まで泣いて、笑って、一生懸命生きていきたいです。

前号の「三宝」についてご意見を頂戴しました。三つ目の家の宝で父親にだけという表現は、いろいろな事情から父親がいらないというケースも多くあり、説明が足りなかったように思います。

父親とは、父性を備えた家族の精神的な支柱です。つまり、家長と読み替え、一目置くという意味です。

自分の子宮内相当の世界に相手置き、限らない優しさの母性に対し、父性は外部へと開かれた世界に相手置き、力強さを象徴とします。人として自立するにはこの両方のバランスが必要ですが、近年の日本の社会や家庭にみられる諸問題は父性の欠如が原因と考えられ、その復活を図ろうとするものです。(文)

### 編集後記

→ チャリティ販売された「希望の缶詰」震災直後の数日間、救援物資が届くまで多くの人々を救った缶詰は、石巻自慢の海の幸が詰まった「笑顔がこぼれる美味」、石巻の漁業が復活へ向けての希望でもあります。



→ 被災地はこれから寒くなります。防寒のための支援物資に添えるメッセージを参加者が心を込めて書きました。

### 三宝

- ・国の宝 公共の乗り物では立っている
- ・地域の宝 川駐車場では遠くに停める
- ・家の宝 父親にだけ キッチン挨拶する